

やりがいある自治体職場を 次世代へみんなでバトンをつなげて

私の「2025年の抱負」—この一年がんばりましょう



結成35周年記念トークセッション—後編

次世代に大阪自治労連の運動をつなげるため、1月6日におこなった結成35周年記念トークセッションの後編です。「いまチャレンジしていること」「これからやりたいこと」「私がめざしたいこと」などを大いに語りあいました。

安心して働き続けられる 職場をつくりたい

尾崎 労働組合として、チャレンジしたいことは何ですか？

塚元 同期や若い府職員が、志半ばで退職してしまうところを間近で見えました。なので、何かあった時に労働組合が頼りにされる存在になりたいですね。労働組合の活動を通じて、職場や職種の違いをこえて、いろんな人とつながりあえるところが好きです。

いま、働きつづけられる職場をつくるため、若い組合員と一緒に活動しています。月に1回、組合事務所に集まって、お弁当を食べながら気軽に会話を楽しむ「オフ



塚元 寛貴さん

若い自治体職員が住民の立場から考えることが非常に難しくなっているんじゃないか。

私たちが掲げてきた「住民の繁栄なくして、自治体労働者の幸福はない」とのスローガンを若い人たちが引き継いでくれて、がんばっていることに感動しました。

身近な存在で 頼りがいある労働組合を

尾崎 今後やりたい労働組合のとりくみは何ですか？

國乘 保育部会長を経験させてもらい、大阪府内や全国の保育士仲間ともつながる中で、「みんなと保育に対する思いは一緒やな」と実感することができました。だからこそ、「おかしいことはおかしい」ときっぱり言える労働組合の力を発揮して、これからは「なま」と強くつながり、要求実現めざしてがんばりたいですね。

塚元 いま、府庁のトイレや空調の改善に向けた府職労のとりくみが注目を集めて報道もされています。実は、以前から言われてきた課題でしたが、受け止めきれいななかったんです。一人ひとりの声を大切にすることで、さらに組合を身近に感じてもらえる第一歩かなと実感しています。府職員だけでなく、府民のみなさんも含めて、「大阪府職労を応援したい

- 出席者
- 徳畑 勇さん 大阪自治労連顧問 (元執行委員長)
 - くにのり 國乗あゆみさん 東大阪市職労 (保育士)
 - 塚元 寛貴さん 大阪府職労 (行政職)
 - 司会：尾崎 一美さん (大阪自治労連副執行委員長)

会」を続けています。

コロナ以前ですが、阪堺電車の「チンチン電車」を貸し切って、楽しい交流イベントを企画しました。みんなが笑顔で和気あいあいの雰囲気は今でも忘れられません。もう一度、そんなとりくみをやりたいですね。

國乘 未来を担う子どもたちが、みんな元気に成長してほしいというのが一番の願いです。そのため

な」という大阪府職労ファンを身近なところで増やしたいですね。徳畑 大阪自治労連には「幾多の困難を乗り越えていく労働組合」という大きな課題があります。

長年にわたる自治労連運動で築き上げてきた「民主的自治体労働者論」を学んで、たたかう仲間(組合員・役員)を大きく育てて、みんなできつよにがんばってほしいですね。



子どもたちと
尾崎 一美さん

尾崎 塚元さんと國乘さんの「働きつづけられる職場」に対する問題意識は、私自身も1年半の大阪自治労連専従役員として、各単組のとりくみを通じて、非常に共感できる内容でした。そして、徳畑さんのお話を聞いて、どんな時代でも環境の変化にも「大阪自治労連」のめざすベクトルは同じであることが確信になりました。

大阪自治労連の結成と今につづけたたかう運動の歴史に学び、2025年春闘でも「対話と学びあい」をひろげ、仲間を増やして要求を実現させよう。そして、私たちが次世代にバトンをつなげよう。

にも、働き続けられる保育所になりたいと思っています。組合アンケートでは、若い保育士ほど「疲れている」という回答が多く、「辞めたいと思うことがある」「今すぐ辞めたいと思う」という設問にマルがつけられています。

いま保育現場をめぐって、「劣悪な保育実態」「不適切保育」「低賃金」などで、保育士離れが大きく取り沙汰されています。

それでもコロナ禍で、医療や公衆衛生などに従事するエッセンシヤルワーカーの子どもを預かるた



会場(大阪グリーン会館ホール)いっぱい100人の参加者にお話を聞いていただきました



國乘 あゆみさん

め、保育所を開設してきました。

「電気・水道・ガス・保育」と言われるように、私たち保育所で働く仲間が社会的インフラの重要な役割を果たしていることに誇りを感じています。若い保育士といっしょに「もっと保育士が増えて、保育士基準など制度も大幅に改善されたら、みんな楽しんで保育がしたいね」と要求をかけたて、保育職場にも明るい希望がもてるようにしたいです。

尾崎 お二人の話から徳畑さんはどう思いますか。



徳畑 勇さん

徳畑 私たちが自治労連を結成した当時と比べて、自治体職場や住民の意識が随分と変わっていると思います。そういうもつで、「自治体の仕事はどうあるべきか」と

今月のキーワード

エッセンシャルワーカー

人々の生活を支えるため必要不可欠な職種に従事する労働者です。新型コロナウイルスの感染拡大に伴う「非常事態宣言」時でも、人々の生活維持のために現場に出て活躍したのがエッセンシャルワーカーです。いかなる状況下でも必要とされる社会生活を支える職種です。保育士は利用者との密接を避けることが困難な職種です。子どもたちの「命を預かる仕事」として、高いリスクにさらされながら緊張感と責任感をもち職務に向かっています。

今月のキーワード

自治体職員の離職率

安定した収入で人気だった自治体職員の退職が止まらず、総務省集計で教員や警察などを除く一般行政職のうち、2022年度に主に自己都合退職は1万2501人。この10年で約2.2倍。賃金の不満や業務量の増加が大きな理由です。30代までの若手が全体の3分の2を占め、住民サービス低下や自治体の行政運営にも支障が出ています。また、「精神及び行動の障害」を理由とした長期病休者は10年前の約1.8倍、15年前との比較では2倍を超えています。